

8月27日（木）、沖縄国際センターにて、日本の政府開発援助（ODA）の実施機関である独立行政法人国際協力機構（JICA）の依頼を受け、「地域に根差したインクルーシブアプローチによる障害者の社会参加」をテーマに研修講話を行いました。

この講話は年間3回ほど依頼をいただいているもので、今回は、中南米7か国の国際協力都市から派遣されたボリビア、コスタリカ、ドミニカ、メキシコ、ニカラグア、パラグアイ、ペルーの皆さんを対象に実施しました。研修員の皆さんは、それぞれの国で障がい福祉に携わる専門官や大学講師などで、社会福祉の分野で重要な役割を担っている方々です。

講話では、保護者によって組織された「育成会」について、その成り立ちや全国・沖縄での活動の歩みを紹介するとともに、知的障がいのある方の特性、障害者手帳制度、障害年金、教育、就労など、生活に関わる様々な制度についてお話ししました。

さらに、知的障がいのある方が、警察で取り調べを受ける際や拘留された場合の課題、虐待事例、優生思想の問題にも触れ、障がいのある人の尊厳と人権を守ることの大切さについてもお伝えしました。また、地域の施設や事業所において、障がいのある方々がどのような支援を受けながら活動し、社会との繋がりを築いているかについて、実際の取り組みを交えながら紹介しました。

研修生の皆さんは、日本の障害福祉制度だけでなく、保護者の立場から長年にわたって権利擁護運動を続けてきた育成会の存在と、その役割にも強い関心を占めされました。講話の途中には、「自分たちの国では、どうなっているのか」「日本との違いは、何か」といった日本の制度と自国の違いについての質問や意見が次々と寄せられ、気が付けば2時間半の予定を超え、3時間を超える講話となりました。

それほどまでに、障がいのある人の自立や社会参加、そして一人ひとりの尊厳を大切にしたいという皆さんの思いは熱く、国は違ってもその願いには共通するものがある事を実感しました。今回の研修を通して改めて感じたのは、障がいのある人が地域の中で自分らしく暮らし、社会の一員として大切にされることへの願いは、国境を越えた共通の思いであるということです。

今回の講話はすべてスペイン語で行われたため、通訳を務めてくださった方には、大変お世話になりました。言葉や文化の違いを超えて、思いをつないでくださったことに、心より感謝をするばかりです。

研修の最後には、私の事業所・おきなわ工房の利用者の皆さんが心を込めて作ったキーホルダーをお土産としてお渡ししたところ、皆さんは大変喜んでくださり、笑顔で受け取ってくださいました。小さなキーホルダーが、沖縄の学びと交流の思い出となり、それぞれの国へ持ち帰られることを嬉しく思います。

今回の出会いが、それぞれの国における障がいのある人のより良い暮らしと社会参加につながり、そして「誰もが地域でともに生きる社会」の実現に向けた、新たな一歩となることを願っています。国境を越えて交わされた熱い思いと笑顔—。今回の研修は、私たちにとっても大変貴重で、心に残る交流の機会となりました。

特定非営利活動法人
おきなわ自立支援センター
おきなわ工房
理事長 田中 寛